



品川くみん

オンブズマンの会

発行

04年11月
No. 34

品川区民オンブズマンの会

〒140-0015

品川区西大井4-21-10

事務局 田出 (3775-4658)

(二〇〇〇四年八月二十八日～二十九日) 十二回大会は九月で別府

第十一回全国市民オンブズマン函館大会

行財政の密室に光を 警察ウラ金から巨大ダムまで

大会参加報告

第一日目の全体会議は「公共事業の見直し」「巨大ダムについて(八ツ場ダム)」「議会改革」の報告があり、警察裏金問題では大谷昭宏氏(ジャーナリスト)の講演と大谷昭宏市川守弘(弁護士)原田宏二(元釧路方面部長)斉藤邦雄(元弟子屈署次長)北海道新聞記者の五氏によるパネルディスカッションが行われました。

大谷昭宏氏の講演(要約)

「取材で一昨日までシアトルにいてイチロウの一九八号のヒットをみて、その間、女子マラソンが大躍進。オリンピックで個人が力を持っているのに団体となるとからつきしダメ。学校など監督が根性だ精神力などと騒いでいればよいというリーダーもいた。しかし柔道では山下さんをはじめとして国際連盟でルールまで英語で要求を通す。こういう指導者がいて個人スポーツは躍進した。組織となると全然ダメ。石頭のOBは去っていかず、野球界にもたかが選手などと言うわけのわからぬリーダーがいる。ダメなこの国をどうやって変えていくのか、オンブズマンの活動がきちんと浸透していくかどうか、が問われている。」と述べ

以前、愛知県警の内部告発から不正を追及し



「警察だけでなく年金を食いつぶしている社会保険庁。サンデープロジェクトで追及した。国会に参考人として呼ばれた。保険庁の役人はシロアリだ。風呂おけの底が食われたら、いくら水を入れてもたまらない。といったら厚生省は怒り狂ってコイツラとシロアリ

を議事録から削除せよといってきた。どこが悪いと書き立てたら取材に応じないときた。頭にきたからシロアリとタイトルに使わせてもらった。永久に立ち入り禁止は解かれ「ない」とタイトルの意味を話し、一線の刑事はせつせと裏金の領収書を書かせられ、おいしいところはキャリアが持つていく。ここに裏金の問題が如実に現れていると述べ「この役人たちの体たらくをほったらかし、日に追うこと」にどうしようもない国を作っておいて

子供たちが悪い、よい子に育ててというのはどだい無理。昭和二十年～三十年頃は子供たちを飢えさせない、伝染病で死んではならないと、すくなくとも心意気のある役人がいた。いま北海道新聞やオンブズマンの方たちがこれは許してはならない、ほうつてはいけないと活動している。私たちは子どもたちに誇れる国を創ってきた、この社会に入ってきて来いと言えるかどうか、将来を見据えたこれらの活動にかかっているのではないかと話しました。

警察の腐敗体質追及の手はゆるめない

告発の勇気を知る (パネルディスカッションより)

二人の警察官の勇気ある告発によって警察の不正な裏金操作が明らかになり、今も実態の追及が行われています。このディスカッションを聞いて警察の腐敗の根深さが、こんなにひどいものかと実感させられました。裏金といえばチョロマカシタ金、余った金を貯めといて、かげで掴ませる金とっていましたが、警察は人件費や捜査費など配分される金、すべて裏金にしてしまう。そして上層部にはたつぷりとお金が懐に入っていくという仕組みだそうです。この裏金の表に出る支出をいかにごまかすか、監査にバレないように鍵をかけた一室に閉じこもって、朱肉の色も変えながら領収書などの書類を偽造した。巨大な組織にもめげず、こんな事実を明らかにした勇気はどこから出てきたのだろうか。拳銃摘発捜査の優秀な部下がいた。情報を取るために金がかかる。ところが裏金操作のためにろくな捜査費も出ない。思い余って麻薬密売に手を出してしまった。上層部にはなんのお咎めもない。部下を弁護出来なかった悔しさ。これが一つの動機。また北海道新聞が粘り強く裏金問題を記事にしていた。オンブズマンも動き出した。個人では組織に押しつぶされる。不正な操作をしていて、これでいいのかと嫌気がさしていた。生活のこともあったが、家族もやるなら実名でと支えられ、勇気がでた。弁護士と相談して告発に踏み切った。いま、警察OBと市民オンブズマンが協力して「明るい警察を実現する全国ネットワーク」を設立しました。徹底的に追及した北海道新聞裏金問題取材班が日本ジャーナリスト会議の大賞に選ばれました。

政務調査費の裁判(九月十五日) 次回は十一月五日

第一回の口頭弁論が行われました

不正な支出金を返す義務は、会派か代表者かの、前回と同じような論議で始まっています。

第十一回全国市民オンブズマン函館大会宣言(要約)

警察の透明度と公正さをたかめよう

昨年十一月に北海道で発覚した旭川中央署の捜査用報償費不正支出事件はこれまで日本各地で明らかになった警察の不正支出と全く同一の手法であった。以降、全国各地で酷似した手法の不正経理が明るみに出たことよって、不正支出は警視庁と北海道警察だけの問題でないことが明らかになった。ところがこれに対して警察がとった対応は真相究明とは正反対の犯罪の隠蔽であった。もはや自力更生を期待することは出来ない。市民の手で警察情報の非公開処分に対する取り消し訴訟を全国で提起し監査委員、公安委員会への働きかけなどの取り組みで透明度と公正度を高めよう。

ムダな公共事業をやめさせる取り組みを強化しよう

地方自治体が推進する公共事業の規模は年間二十五兆円に及ぶ。地方自治体は巨額の負担金を支出している。私たちの調査の結果、一部の事業は中止を決めたが中止事業の総額は二千七百億円、長野と広島が中止をきめた額の半分に過ぎない。私たちは長野や広島を取り組みを全国に広げることを目指しムダな公共事業を差し止める住民訴訟の全国的支援、第一弾として八つ場ダムへの住民監査請求、訴訟を支援する。

談合を止めさせる取り組みを強化する

ムダな公共事業が反省もなく継続される背景には入札談合とそれを支える権利の闇が広がっている。「一般競争入札の大幅導入」「地域用件の撤廃もしくは緩和」という談合防止に踏み切った自治体は平均落札率が落ちている。談合を放置することによる自治体の損害は巨大。これまでの経験を生かし談合の責任を追究し談合しにくい入札制度を確立させる取り組みを強化する。

第一日目の全大会の各地報告で四つの地方オンブズマンの報告がされましたが、その一つに「品川区民オンブズマンの会」も割り当てられ、五分間でしたが活動の現状を報告してきました。

品川区も外部監査の条例がほしいと思った

大会は議会、公共事業の見直し、包括外部監査、談合、警察の五つの分科会が行われましたが議会と包括外部監査の分科会に参加しました。その一つ、包括外部監査の報告をします。

包括外部監査制度は、これまで自治体内部の職員や地元有力者などで行われていた監査制度に、なれあいなどの問題が多く批判が強まっていたため、1997年に政治的精神的に独立した外部監査による外部監査制度が法制化され99年より実施されました。都道府県、政令市、中核市には設置が義務づけられていますが、その他の市町村、特別区は条例で導入したところもあります。全国市民オンブズマンは、毎年、各自治体の監査報告を全部調べて、通信簿をつけてきました。分科会では、その中から優秀な新潟、八王子の監査委員をむかえて質疑、討論をしました。全体の問題点として外部監査人の選任に市民の意向が反映していないところがあり、客観的な選考基準が必要で選考理由も公開すべきだ。監査結果の意見を自治体がただ聞きおだけという態度を改めさせる。監査人は捜査権がないので疑わしくても現場の立証が難しい、傍証で攻めている。外部監査を自治体職員、議員も全部

読んでいない。報告書を読みこめないような議員は議員の資格がない。自治体への職員への説明会や平易な文章でのダイジェスト版など、市民に読んでもらう工夫が必要である。活用の面では監査報告書の指摘で運動に火がついたところ(ダムなど)や、八王子では議会で補助金の検討委員会が作られた。オンブズマンが監査請求を行っているところもあり、市民運動に活用させようと話されました。その後、監査報告書の実例(新潟)を読む勉強もしました。東京23区では外部監査を条例で設置したのは港、文京、目黒、荒川、豊島、足立ですが最近豊島区が財政難(年間コスト500万~800万)を理由に廃止を決めた。外部監査の指摘で4年で4億円の支出削減をしたのに、おかしいとの報道もされています。品川区も条例を作り外部監査の導入をしなければと思いました。

(包括外部監査分科会出席者 田出明子記)